

## 図書 紹介

### 日本人が知らない漢方の力

著者：渡辺賢治（慶應義塾大学漢方医学センター）

発行：榊祥伝社／〒101-8701 東京都千代田区神田神保町 3-3／

TEL03-3265-2310／新書判／209頁／価格 724円（税別）／2012年2月10日発行

「漢方」は中国から伝わり、日本独自の発展を遂げてきた伝統医学であり、西洋医学全盛の時代に退潮気味であると言われているが、風邪から認知症、抗がん薬の副作用の軽減など現在もさまざまな局面で活用されている。

序章 世界が注目する漢方——日本人が知らない実力

第1章 実は「最先端医療」の漢方

第2章 漢方の治療はどのように行なうのか——「証」と漢方薬

第3章 漢方薬の歴史——日本文化としての漢方

第4章 漢方と西洋医学の融合——日本版総合医学を目指す

第5章 「漢方」存続の危機

以下、主な内容を紹介すると序章では、インフルエンザに効く漢方薬、なぜ今、伝統医学が見直されているのか、ハイリスク、ハイリターン型医療からの転換、西洋医学と伝統医学が融合している日本、実は「漢方」は日本の医学である、WHOが取り組む伝統医学のグローバル化、漢方が今、危機に瀕しているなどである。第1章では、インフルエンザ対策に漢方を活用せよ、抗がん剤の副作用を抑える効果、更年期障害やアレルギーへの高い効果、認知症にも漢方が効く、高齢社会におけるメリット、古来からあるアンチエイジング、薬よりも「養生」が大事、流行の健康常識に振り回される現代人、中庸—「ほどほど」が漢方の理想などである。第2章では、漢方診断は「証」（ショウ）を診る、証は何で決まるか—「虚・実」と「寒・熱」、「気・血・水」のバランスを重視する、漢方薬の原料とは、漢方の診断はどのように行うのか—「望・聞・問・切」、煎じ薬とエキス剤、西洋薬・中医薬との違い、漢方薬に副作用がないわけではない、解明されてきた漢方薬にも副作用がないわけではない、解明されてきた漢方薬の効能メカニズム、漢方薬の抗酸化作用などである。第3章では、漢方が中国のものだと思ったら大間違い、実学としての漢方医学、漢方が生んだ日本の実証主義、世界最高水準の医学を捨て去った明治政府、中国伝統医学と日本の漢方の違い、シンプルで実用的な漢方の証、衰退から復活へ—漢方復興の

立役者たち、日本では 90%の医師が漢方を処方している、東洋的な発想への回帰などである。第 4 章では、西洋医学と東洋医学の違いとは、漢方だからこそ西洋医学を徹底活用する、現代医学の隙間に落ちる患者たち、日本の医療が抱えている課題、漢方薬の科学的根拠を求めて、世界が漢方に注目する理由、「国家医学」として推進せよなどである。第 5 章では、漢方に保健が利かなくなる？、生薬が手に入らない、「生薬資源戦争」になってしまうのか、「薬価」の壁—工業製品の西洋薬と同じ基準でいいのか、次々と撤退する漢方薬メーカー、漢方薬は”安すぎる”、生薬生産にも日本の技術が活かせる、生薬栽培の再生は「農」の再生に重なる、国際標準化を狙う中国、日本人の「無関心」が漢方を滅ぼす、漢方を国民の医療として残すかどうかなどである。

著者は、漢方薬にはタミフルと同等に効く薬や大腸がんの治療に使われる薬もあり、またさまざまな症状を訴える高齢者医療、専門細分化の進む西洋医学では対処できない病などに、患者をトータルに診る「総合医」として漢方の持つ役割は今後ますます大きくなっていくと述べている。世界の医学界では伝統医学への関心が高まり、中国や韓国は、自国の漢方をグローバル・スタンダードにしようとしのぎを削っており、日本の漢方は出遅れるどころか存続の危機にあるという。生薬は中国からの輸入に依存するため「生薬資源戦争」が起きていることにも危惧しており、漢方への関心を国民が持つことによって漢方の未来が開けると結んでいる。

本書には微生物関連では腸内細菌のコントロールについて触れられているが、品質管理や微生物管理には言及されていないのは残念である(学会事務局)。